

第 10 章 「支援する／される」とは違う関係を

宮城県・community center ZEL／やろっこ

太田ふとしさん



実施日：2019年6月25日 聞き手：前川直哉・杉浦郁子

実施場所：community center ZEL（仙台市）

【プロフィール】

1974年、宮城県仙台市生まれ（インタビュー時44歳）。団体職員。ゲイ・バイセクシュアル男性のためのHIV情報発信拠点「community center ZEL」（仙台市青葉区国分町）代表。community center ZELは厚生労働省の委託事業として、公益財団法人エイズ予防財団が運営。HIV/AIDSの正確な情報を発信するボランティア・グループ「やろっこ」代表。あらゆるセクシュアリティの人が尊重されることを目指すグループ「Anego」にも設立当初から関わる。

1. 「やろっこ」立ち上げ以前

◆出身と家族

出身は仙台です。24歳から6年間ほど、仕事で同じ宮城県内の石巻と松島に住んでいた時期がありますが、今はまた仙台に戻っています。現在は母と2人暮らしです。父はもう亡くなっています。姉が2人いますが、2人とも嫁いで家にはいません。

家族には今も、自分のセクシュアリティのことは伝えてないです。特に亡くなった父が、すごくホモフォビアが強い人だったので、伝えないほうがお互いのためだろうなと思って。姉にも伝えてないですね。やっぱり父親の影響があって、家族全体に結構ホモフォビアな感じがあるだろうなという感じです。ただ母親は、たぶんうすうす気付いてると思うんですけどね。だって、私は松島にいたとき、男と同棲してるので。「友達だ」とは言ってるけど、歳もすごい離れてる人ですからね。なので、うすうす気付いてるんだろうとは思いますが。

テレビで「ゲイのカミングアウトで感動」みたいな番組があると、母親は「今どき、KABAちゃんとかもいるのにね」とか言ってます。母親も変わったな、とは思いますが。でも、自分のセクシュアリティについては今も伝えてないですね。

◆高校・大学の頃

セクシュアリティについては、生まれつきのゲイだと思ってます。高校生ぐらいのときにはもう明確に、自分がゲイという自覚はありました。ただ、初めてゲイ雑誌を買ったのは

18歳のとき、大学に入ってすぐですね。当時は実家暮らしでした。

大学に入った後、1993年頃だと思うのですが、自分の通っていた大学に伏見憲明さんが来たんです。ゲームブメントみたいな感じで掛札さんと2人で来てて、それは聞きに行ってますね。たぶん、LGBTの活動的なものに触れた初めての機会です。そのときに「生まれて初めてレズビアンを生で見た」と思った記憶があります。

◆ゲイバーに行く（1994年頃～）

初めて自分以外のゲイの人と会った、伏見さんのように「見た」じゃなくて「会った」のは20歳のときでした。まだネットの普及前で、出会ったのもゲイ雑誌の通信欄を通じてでした。当時、他にあったのは伝言ダイヤルとかですね。

初めてゲイバーに行ったのも20歳の時です。そのとき付き合った人がゲイバーの常連だったので、連れていかれたのが最初です。

当時の仙台のゲイバーって、今と違って超オネエだったんですよ。店中の会話がオネエで、みんながものすごく突っ込み合うみたいな感じ。最初デビューしたときは、みんなポンポンポンンしゃべってるし、みんなバリバリオネエだし、結構なじめなくて、一言も喋らなかったです。お店に入ったときに「お名前は？」って聞かれて、名前は言ったんですけど、それからずっと1時間くらい何も喋らなくて。当時、付き合ってた人は常連なので、みんなとバンバン喋ってました。

隣でポツンとしてたら、店子さんに「あんた、入ってから1時間ぐらい、名前しか言っていないわよ」って言われて、ますますちょっと怖いみたいな感じ。だから、ゲイバーの最初の印象は「怖い」という感じでした。嫌ではなかったんですけど、喋れない、話についていけないっていうのが一番大きかったです。当時は全然お酒飲めなかったんですけど、その時はやることがないからひたすらお酒を飲んでました。ビールを瓶でたぶん5～6本飲んだんですよ。そしたら一緒に行ってた人に「お酒飲めないって言ってたけど、飲めないじゃない、そういうのはザルって言うんだよ」って言われて、「次からビール頼むな」って怒られました。ビールだと割高じゃないですか。だから「ビールは頼むな。ボトル入れるから、それだけ飲みなさい」って言われた記憶があります。

ゲイバーも最初のころは、お付き合いしてる人と一緒に行く感じだったんですが、22～23歳ぐらいのときには、もう1人で行くようになってましたね。

当時は大学院に通っていたんですが、ゲイバーで同じ学部の後輩と会ったりもしました。あんまり隠してもいなかったもので、ママに「大学どこなの？」って聞かれて答えてたら、「あの子、後輩だよ」って言われて、それで話すようになって。その後、キャンパスでたまにすれ違ったりすると「おお」みたいな感じでした。当時、自分の通っていた大学にゲイサークルはなかったと思います。

◆ゲイ・サークル E-betcha に参加（1999年頃～）

LGBT系のサークルに参加したのは、小浜さん（本冊子にインタビュー掲載）がやったゲイ・サークル E-betcha（いいべっちゃ）が初めてです。就職してすぐの頃で、24歳かな。

石巻に転居した後だったと思います。E-betcha はゲイ雑誌、おそらく『Badi』の通信欄に「定期的に活動してます」みたいな感じで載っていて知りました。

サークルより前にゲイバーには出ていたので「誰か同じゲイの仲間に会いたい」とか、そういう気持ちは全くなくて。ただ単に、仙台から石巻に離れちゃったこともあって、「そういうサークルがあるんだったら行ってみよう」という感じです。何か出会いを期待してとかではなくて、「色々あるコンテンツのうちの一つとして、サークルっていうのもあるんだったら行ってみよう」という感じですね。

石巻に引っ越して、友達がなくて寂しいということでもなかったんですよ。就職して自分の自由になるお金も増えて、毎週のように仙台のゲイバーに飲みに行っていましたし、友達もいっぱいいましたから。サークルは、その中の一つのコンテンツとしてでした。当時 E-betcha は、たぶん月に 1 回ぐらいしかやってなかったもので、「どうせ仙台に飲みに来てるし、行ってみるか」という感覚です。だから E-betcha の運営に関わるとか、そういう感じではなかったです。ただ、参加してただけ。

E-betcha も昔は合宿したりとか、結構活動が盛んだっただけなんですけど、俺が行った頃にはもうそんなことはなくて。公共施設の中でこじんまりと集まってお話しするだけの、交流会みたいな感じでした。

◆オネエ言葉に慣れていた

そこに新しく来る人たちって、どっちかというところ、これまでそういう友達とかが少ないような人のほうが多いんですよ。でも E-betcha の中でも結構オネエさんが多くて、オネエの人たちがたくさん喋ってる感じで。最初に参加したときは確か 3 人ぐらいで一緒に行ったんだけど、あとの 2 人はもう次から来なくなっちゃった。その後、たまたま会ったときに「来なくなっちゃったよね」と聞いたら、「いやいや、あのオネエ言葉についていけなくて」と言っていました。

たぶんそこで、一種のジェネレーションギャップのようなものが出てきてたんですね。俺はもうゲイバーに行っていたので、オネエがどれだけ喋ってても全然気にしなかった。E-betcha に入ったときから新人扱いはされてなかった。一緒に行った人はみんなうぶというか、すごく緊張してる感じだったんだけど、俺の場合は飲み屋に比べたら全然平気な場所だったので、バンバン喋っていました。

俺がゲイバーに出はじめた頃は、みんなオネエだったので。ゲイバー対抗のバレー大会があるんですけど、結構みんな「そーれ！」ってやって、失敗したら「ああっ、ああっ」とか、「こわーい」とか言ってる感じだったんです。でも今、同じようにゲイバー対抗のバレー大会をやっても、もうめっちゃバンバン打つし、声がそんな「そーれ！」とかオネエの言葉が出てなくて。

友達と見ながら「ゲイのオス化が進んでる」って話してました。むしろノンケのほうが草食男子とかも多いから、「ノンケ男子のゲイ化が進んで、ゲイのオス化が進んでるよね、最近」「環境ホルモンのせいかな」とか冗談で話しています。仙台でオネエ言葉を使うお店もまだ残っているけど、「昭和のにおいがする」とか言われていますね。

◆東北 HIV コミュニケーションズの電話相談（2000 年頃～）

2000 年頃、小浜さんがやっていた東北 HIV コミュニケーションズ (THC) の電話相談員も始めました。養成講座を受けて。だから、E-betcha に行って1年か2年で、THC に入ったと思います。この電話相談は、厚労省とは無関係のボランティアベースの活動でした。

実は HIV のことは、高校生ぐらいからすごく気になっていたんです。小学生の頃がエイズパニックが起きてたときで、「もう東京にはエイズの人がいる」と思っていたんですね。当時はまだ駅に水飲み場があって、それで水を飲んだとき「エイズがうつるんじゃないか」という不安を持った記憶を、鮮明に覚えていて。

その後、自分がゲイだという自覚もありましたし、「ゲイの病気」という刷り込みもあったので、自分にとってエイズという存在は結構身近なものに感じていました。

高校生のときは、社会がエイズパニックから「ちゃんと HIV についての教育を普及しましょう」となる転換期で、早見優が「コンドームを使いましょう」とかっていうコマーシャルをやったりする時代だったと思うんですよ。週刊誌にもバンバンバンバン HIV の情報が載っていました。「HIV はこれでうつる、うつらない」みたいな特集があって、それを切り抜いていた覚えもあります。

そのときに平田豊さんという詩人が、自分が HIV に感染していて、しかもそれが同性間接触による感染だと公表して、死ぬまで自分の写真と一緒に手記を連載している雑誌があったんです。それもすごく読んで、そこでの興味関心もありました。

あと、ちょうど薬害エイズ訴訟が解決するころの時期だったので、川田龍平君など血友病の人たちを題材にした芝居を見に行きました。芝居の最後、龍平君はそのときはまだ顔を出してなくて、白いスクリーンの後ろから影絵みたいに「皆さんの前で本当は顔を出してお話をしたいけど、まだまだ差別があるので、それができないことが悔しいですが、自分の声を伝えたいので」と言っていたのを覚えています。

こんな感じで高校生のころから興味関心があったんですけど、大学でゲイデビューしちゃったら断然そっちのほうが楽しくなって、エイズのことを忘れていたんですね。

もうそれなりにいろんな経験もして、検査も受けに行ったりしてたんですけど、感染経路の情報があふれ過ぎていて分からなくなってきた。どこまでがセーフでどこからが感染するのかとかが分からなくなったときに、「一番正しい情報を知るには、自分が教える側になればいいな」と思ったので、電話相談員の養成講座を受けたという感じですね。

その頃、ちょうどまたゲイ雑誌で HIV の情報が出てきてたんです。その頃から、「何が正しいか分からないな」と思って。治療法などもどんどん進歩してる時期でしたし、「最新の情報を手に入れるには、自分がボランティアになることだ」と思ったという感じですね。セクシュアリティに関するボランティア的な活動に参加したのは、この時が初めてです。

THC の電話相談は、ゲイに限定した活動ではないです。逆に、ゲイからはたぶん 10 本に 1 本も掛かってきてなかったと思います。皆さん、どちらかというストレートの男性が多くて。ほとんどが感染不安の人ですね。最初は自分も、「HIV の陽性者の人の支援とかができれば」と思ってたんですけど、ほとんどそういう人からのアクセスはなくて。むしろ感染不安の人の対応をする感じでした。

2. ボランティア・グループ「やろっこ」

◆THCGV から「やろっこ」へ（2004年～）

2004年に小浜さんが、ゲイをターゲットにした活動を立ち上げるという話になりました。厚労省の研究班とかも絡んでたんじゃないかなと思います。ただ小浜さんは、セクシュアリティがゲイかという微妙だと自分でも思っていて、「ゲイ向けのボランティアチームをやるんだけど、自分1人ではできないから」ということで俺に声がかかったんです。

「やりませんか」と言われたときに、すでに他の地域でそういうゲイ向けの HIV に関するボランティアがあることは、雑誌とかにも載ってたので知ってたんですよ。ビーチでコンドームを配ってる人とかがいたんですよ。その活動がかっこいいなと思っていたので、「全然やります」みたいな感じで。それで活動を始めて、たぶん1年後ぐらいに厚労省の研究班の話が来ました。

最初は小浜さんが付けた THCGV っていう名前だったんです。東北 HIV コミュニケーションズのゲイボランティアチーム。たぶん2年ぐらいは、その名前で活動してたんじゃないかと思うんですけど。ただ、覚えてもらえないんです。

ゲイのバレーボール大会に協賛して、そこで HIV についての啓発をさせてもらう代わりにボールを寄付して、という活動もしてたんですね。そのとき、やっぱり主催者の人も THCGV って覚えられないから、紹介されるときに「あの、ほら、あの、エイズの人たちです」という感じで言われて、それで会場から笑いが起こっちゃうこととかがあって、これはちょっとまずいなと。もしかしたらそこでバレーをやっている人の中にも陽性者がいるかもしれないのに、それで笑いが起きるってすごく悪いことだなとも思ったので。それで「愛称を付けましょう」という話になって、「やろっこ」に変わったんです。

グループ名は、いくつか案を挙げた中から決まりました。「やろっこ」は方言で「男の子」という意味なんです。仙台のグループだって分かるようにということで。

「これでどうかね」と言ったときに、小浜さんが「やろっこなら OK、男の子だから」という感じで。もっと男性的な名前だったら小浜さん的には抵抗があるみたいな話をしたんですけど、「やろっこだったら、私でも大丈夫だわ」と小浜さんが言って、「じゃあ、やろっこにしましょうか」となりました。

ゲイの男性を主なターゲットとした、HIV についての啓発やアウトリーチという目的が、当初から明確にありました。最初は厚労省とは関係なく、ですね。

THC の電話相談でゲイが多かったわけではないのですが、やっぱり明らかに男性同性間での HIV 感染が増えていましたし、全国的にもゲイ向けの HIV に関する啓発活動が盛んになるムーブメントが起きてきた時期でした。

2004年に活動が始まったころは、まだ松島に住んでいたと思います。当時勤めていたのが食品会社だったので、土曜日が休めないんですよ。食品会社の休みって日曜日と水曜日とか、市場の休みとリンクするので。土曜日に休めなくて、土日の活動ができなかったのが結構つらくて。

それもあって仕事を辞めて、今の仕事に転職したんですね。2005年に父が亡くなったこ

ともあって仙台に戻ってきて、仕事も「活動ができる環境の職場に」ということで、今の仕事に転職したという感じです。

◆「支援する/される」とは違う関係を

「やろっこ」の活動を続けるきっかけが、たぶん二つぐらいあったんです。一つはそれこそ、横浜の海岸でコンドームを配っている人と会ったとき。活動するモチベーションの、一番のきっかけになってたと思います。活動始めて1年以上経って、名前も「やろっこ」に変わった頃の話です。

それまでTHCの電話相談の活動とかでは、陽性者の人と直接会う機会もなかったですし、時々陽性者のスピーカーの人が来る講演会があるぐらいだったんです。THC自体はHIVの感染者と非感染者を区別せずに、共に生きる社会をつくることを理念にも掲げているんですけど、何となく——他のメンバーにちょっと失礼ではあるんですけど——「支援する側の人たち」なんですよね。決してそういうことを口にするわけじゃないんだけど、「支援する側だな、この人たち」というのをすごく感じていて、実はそこに少し違和感があったんです。

「支援する人」というところに自分がいていいのかな、という思いが少しあったときに、横浜の活動をしてる代表の人に会ったんです。今でも活動してる人です。横浜の活動について聞きに行ったんですけど、ホームページに載ってる写真はすごいカッコいい人だったんで楽しみにして行ったら、しょぼくれたおじいちゃんだったんですよ。おじいちゃんって言っちゃ失礼ですけど、しょぼくれたおじさん。だから、第一印象では「なーんだ」って思ってたんですけど。

色々活動の話聞いてたら、「今日の夜に陽性者の人たち2人と、新宿二丁目で一緒に酒を飲むんだけど、来る？」と言われて。「別に差別とか偏見とか持ってないでしょ？」って聞かれて「持ってないですよ」と言ったら、「今後のためでもあるから、おいでよ」みたいな感じで行くことになったんですね。

そしたら行った先で、そのおじさんが最初に「この間、借りてた3,000円」とか言って、その陽性者の人にお金を返してたんですよ。その後も結構、話が盛り上がって「終電なくなっちゃった」とか話してたら、そのおじさんが陽性者の人に「タクシーチケット持ってるでしょ」とか言って。障害用の手帳を持ってるから。「それ、後で買い取るからさ。どうせおまえら近所だから、使っても何千円ぐらいでしょ。だったら俺が横浜までそれ使うからさ」というふうに言って。言われた方は「誰がそんなもん渡すかよ」みたいな感じになってたんです。

それを見たときに、結構ひどいことをやってるんですけど、でも、お金も借りたりしてるわけじゃないですか。「この人は支援する人じゃないんだな」と思ったんです。完全に対等というか、むしろ陽性者の人がおじさんを支援してんじゃん、みたいな感じもあったんですよ。陽性者の人たちは、俺と同年代ぐらい、30前後の子たちでした。

その関係が、「助ける人、助けられる人」じゃなくて、本当に友達みたいな関係でHIVの陽性者と付き合っているのを見て、「こういう関係をつくれるボランティアだったらいいな」

と思ったんですよ。それがすごく、その後の活動のきっかけやモチベーションになってますね。

「助ける人にはなりたくない」という思いがあったときに、そういう、どちらかと言うと駄目な大人なんですけど、それを見たときに「いいな」と思って。

そこにいた陽性者の2人の人も、「自分たちは感染してるからしょうがないんだけど、ただやっぱり感染してることを他の人にはなかなか言えない。こういう、理解があるって思ってる人にしか言えないし、あとやっぱり、自分と同じ思いをするような人を今後、増やしたくもないんだよね」みたいな感じで。「だから、そういうボランティアの活動は必要だと思ってるから、続けてほしい」ということも最後に言われて。それがきっかけで、「じゃあ、続けよう」という感じになりました。

◆HIV 陽性だとカミングアウトされるように

もう一つのきっかけは、周りの人から HIV 陽性だとカミングアウトされるようになってきたことですね。

「やろっこ」に名前が変わってから、ゲイ男性対象の「やろっこ交流会」というのを開いてたんです。公共施設で月に1回くらい集まる活動だったんですが、そこにぽつぽつと、HIV 陽性の人も参加するようになってきて。

THC の事務所は遠いんですよ。街中じゃなくて、車じゃないと行けない。だから「やろっこ交流会」は公共施設でやってました。E-betcha のときは、施設の行事予定表のところには「仙台ユニット」とか、別の名前を出してたんですが、やろっこの交流会は普通に「やろっこ交流会」と書いてました。最初のころはチラシをゲイバーに置いてもらったり、雑誌にも告知を出してたかもしれないですね。

E-betcha がもう、そのときにはなくなっていたので、「やろっこ交流会」は当初、E-betcha の代わりっぽい感じでやってたんですよ。だから E-betcha のメンバーとかも来てました。普通に交流をしながら、時々 HIV について正確な情報を伝えましょう、HIV の情報も得られますよ、みたいなことでやってました。最初は参加者1人とか2人のときもあったし、「誰も来ないね」ってときもあったんですけど、続けてるうちに「HIV の陽性です」という人が来てくれたりとかして。

その人と喋ったりしているうちに、仲よくなって友達みたくなるといふときがあって。そうしたら結構、周りの人、以前からの知り合いとかからも、HIV 陽性であるとカミングアウトされるようになってきたんですよ。それはたぶん、活動してるからじゃなくて、やっぱり「助ける人にはなりたくない」と意識が変わった後なんですね。それがおそらく態度とかで伝わったのかもしれません。どうか分からないですけど。

それで、実は周りに陽性者の人が何人もいたと分かって。それからですね。「自分の友達の中にもいるんだし、この活動を続けていく必要があるな」と思うようになりました。これが二つ目のきっかけです。

◆ラブビーチプロジェクト

仙台のゲイビーチは、震災前まであって、津波の被害で一時なくなってしまいました。

「やろっこ」で「ラブビーチプロジェクト」というのを始めて、ゲイが集まるビーチでのごみ拾いと、コンドームの配布をセットにしたんです。横浜の活動はコンドームを配布するだけだったんですが、自分ともう1人、今はZELの常勤スタッフになってる人と、よくビーチに行ってたんですけど、すごいごみが多くて。みんな食べたお弁当を捨てていたり、それこそティッシュとかコンドームとか捨てていたりという状況があつて。

これがあんまり続くと、たぶん、そもそもマナーの点でビーチを使えなくなっていくというこゝろ。出会いの場という意味のラブのビーチと、ビーチを大切にしましょうという意味のラブビーチとをかけて、「ラブビーチプロジェクト」。これが「やろっこ」のメインの活動の一つになりました。

ゲイビーチはどこも、わりと汚かったんですね。人が集まるようにと、わざとゲイ雑誌のグラビアとかを捨てていく人がいたりすることもあつて。それを自分たちで片付けましょうという活動です。

結構、最初はたたかれました。まず常連のビーチを使ってる人たちから、「こういうことを大々的にして、荒らさないでくれ」と。当時、「ラブビーチに参加しませんか」という募集をゲイバーとかでも配ってたんで。

あと逆に、ホームページをつくったときに、「僕たちのビーチを守ろう」「自分たちのビーチは自分たちで守りましょう」みたいな感じでやってたら、ストレートの人たちから、「お前たちのビーチじゃない、勝手にそういうことにして何やってんだ」みたいな感じでたたかれたこともあります。「自分たちの」みたいな文章を削除したら、その後、ストレートの人たちも特に攻撃的ではなくなりました。

ビーチのごみの清掃を始めると、実際はそんなに外から人が来るわけじゃなくて、普段ビーチを使ってる人がわりと参加するようになったんですね。常連さんで「荒らさないでくれ」と言っていた人も、清掃を2回ぐらいやった後になると、自分のごみ拾いには参加しないけど「みんなでジュースでも飲んで」って寄付をくれたりしました。

◆他の地域にも広がる

この活動は、その後は神戸や浜松でもやられるようになりました。「うちもラブビーチやっていいですか」みたいな感じで言われて。

仙台での経緯があつたので、他の地域で「やりたい」と言われたときは、色々と注意点も伝えましたね。地元の「ビーチの主的な人」の許可を必ず取ることとか。

他の地域でやるときに、ちょっと怒ったこともあります。揃いのユニフォームを着て、「僕たちはボランティアです。利用者じゃありません」というスタンスでやって言われたときに。それは、「自分たちはセックスをしに来ているわけではないです。僕たちはいいことをしている人たち。あなたたちとは違います」という溝をつくるような感じだったので、「そんなことだったら、やらないほうがよっぽどまだ」と話をして。

やろっこの場合はみんな、てんでんばらばらの格好でした。掃除しながら、ゲイビーチと

して利用している人にはコンドームも配って。あとマナーアップで「ごみは持ち帰ってください」とか、「露出行為は自粛しましょう」とかっていうことも一緒に伝えて。

その後も時々やっていると、「やろっこがコンドームを配ってるから、コンドームのごみが増えてるんじゃないの?」とかネットに書かれたりもしてますけど、でもそれがすごく大きなバッシングになるわけではなく。実際、徐々にごみは減っていったので、すごく効果はあるなと感じてました。

◆ターゲットに応じた活動

今はもうやってないですけど、前は「やろっこ」でクラブイベントもやってましたね。男性オンリーで、啓発の場としても活用する形で。

いろいろとターゲットを分けていたんです。ゲイバーやハッテン場などの商業施設を利用する層には、バーやハッテン場にコンドームやフライヤーの啓発資材を置かせてもらって啓発をする。「やろっこ交流会」はどちらかというと、そういう商業施設を利用しない層が対象ですね。それこそ「ゲイバーは怖くて行けないです」とかって人を対象にしていました。あとはクラブイベントとか、そういうルートじゃないと啓発できない層もやっぱりいるので、クラブイベントもやって。そういう街中のイベントに絶対来ないビーチの利用層とかもいるので……と分けて、なるべくまんべんなく。

始めた当時はネットだけを利用する層はそんなにいなかったもので、その層はあんまり想定していませんでしたね。

◆活動資金

「やろっこ」の2年目ごろから、厚労省とかのお金が入っていたと思います。資材をつくるのが一番お金がかかりますね。それ以外の交流会とかは、そんなに。クラブイベントは、厚労省のお金とかは入れなくて、入場料を取ってやっていました。

自分は1年間だけ、厚労省のお金で東北 HIV コミュニケーションズに勤務というのも経験してますけど、ほんと1年間だけで、それ以外の時期は別の仕事をしながらの活動です。厚労省のお金とかだと、入金タイミングが年度末だったりして、ちょっとうまくいかなくて。年俸制みたいになって、しかも終わった後に1年間分のお金をもらうというふうになってしまうと、やっぱり生活が成り立つのは難しいです。

3. 「Anego」の活動

◆「Anego」の活動開始（2007年～）

Anegoのスタートは2007年で、発足に関わっています。「やろっこ」はゲイ男性対象でしたが、Anegoはあらゆるセクシャリティの人が尊重されることを目指す団体です。

やろっこのボランティアメンバーの中に、尾辻かな子さんの話を聞きたい、尾辻さんの講演会をやろうという人がいたのがきっかけでした。その時、やろっこはゲイがメインだったので、「やろっこでやるのはちょっとね」という話になって。当初は実行委員会みたいな形

にして1回限りで終わらせるつもりだったんですけど、会場を借りるのに団体の体がないと借りられなかったの、どうせならと。その時、「こっちはやろっこだから、あねごじゃね？」みたいな感じの、本当に簡単な決め方です。「あねごを平仮名はないんじゃない？」「じゃあ、アルファベットにする？」みたいな感じで **Anego** って、すごい簡単に付けました。パンフレットには **Anti-Normalistic Educational Gender-free Organization** の頭文字だと書いてますけど、これは後付けですね。たまたま初代の代表が、英語ができる人だったんです。

最初は尾辻さんの講演会をやるだけの実行委員会のつもりで始めたんです。講演会の参加者は30人くらいで、女性のほうが若干多いかなぐらいでしたけど、男性も来てました。こちらは当初、LGBTの当事者がいっぱい来ると予想していたんですが、実際やってみたら参加者の半数はたぶんストレートの人で。

セクシュアリティの調査はしてないので正確には分かりませんが、「たぶん半数はストレートじゃない？」という話になって。「何だ、こんなにLGBTのことに関心を持つてるストレートの人がいるんだね」という話になったんですね。

当時、当事者の交流会はあったんですけど、ごちゃ混ぜの交流会がなかったんですよ。ESTOさんの場合は一応、アライもOKとはしてはいましたけど。ストレートの人も参加できて、明らかに支援者じゃないストレートの人で興味関心があって、LGBTの人の話を聞いてみたい、友達になりたいという、そういう感覚の人が集まれる場所がなかった。

だからせっかくその講演会に来た人たちに、今後も、定期的とまでは言わなくてもたまに集まって、何かをするわけじゃなくて、ただ情報交換をできる場所があったらいいのかもね、という感じででき上がったのが **Anego** 情報交換会です。最初は結構固い名前でしたけど、その後「**Anego** ティーパーティー」となって、今も続いています。ティーパーティーが **Anego** の活動の中心ですね。今はZELを会場にやっていて、去年は4回くらいやりました。

◆言っても言わなくても心地よい場所

Anego は今、キャシー菅原さんが代表で、4代目です。私も一時期だけ、間つなぎで3代目の代表をやってます。**Anego** とやろっこは、完全にすみ分けをしていますね。重なってるメンバーもいるけど、団体の目的が全く違うという感じです。

Anego は参加者のセクシュアリティも聞かないんですよ。参加者に「あなたのセクシュアリティは何ですか」ということは一切聞かないで、セクシュアリティも含めて、話したいことを話す。自己紹介でセクシュアリティを言っちゃ駄目というわけではないけど、言いたかったら言うし、言わなくてもいいというふうにしていて。

自己紹介を回すときも、メンバーから始めるようにしています。最初の人セクシュアリティを言っちゃうと、次の人も言わなきゃいけないような強迫観念が出てくるじゃないですか。なので、まずは名前と、あと **Anego** ティーパーティーのときは毎回テーマがあるので、テーマに関するエピソードを言ってください、その中でセクシュアリティをオープンにしたいんだったらしてください、という感じにしています。

これは2007年のスタート当初からしていることですね。そこがたぶん、他との差別化を

すごくしている部分です。Anegoのサポートメンバー、会員さんって、結構ストレートの人が多いんです。それもアライとかっていう感じじゃなくて、純粹に楽しくて来てるという人が多くて。本来は社会全体がそういうふうになれば一番いいんだけど、まだ社会がそうになってないので、Anegoのティーパーティーの時間だけはそういう社会をつくりましょうと。セクシュアリティは別にカムアウトしなきゃいけないわけでもなくて、「言っても言わなくても、みんなが心地よく、それぞれを否定しない、尊重できる空間をつくりましょう」というのが、Anegoのティーパーティーのコンセプトですね。

だから来ている人で、自己紹介で「アライです」という人はいないですね。「私はアライとしてここに来てます」みたいな人はほとんどいない。ティーパーティーに来てるストレートの人は、たぶん純粹に友達としてとか、LGBTの人たちの話も聞いてみたいぐらいの人のほうが多いです。

最近だともう、いろんなマイノリティの人がごっちゃになってきています。在日の外国人の人も来ますし、身体の障害の人も来るし、精神とかの障害の人も来るしという感じで。それも全部こちらから聞いているわけじゃないので、自己申告で言った人の話からですけど。

4. community center ZEL

◆community center ZELのオープン（2010年）

この場所を借りて「community center ZEL」を開いたのは9年前ですね。震災の1年前、2010年の3月20日からです。

厚労省が全国に7カ所のコミュニティセンターをつくと発表して、そこに仙台が入っていたので、「じゃあ、仙台にできるっていったら、やろっこしかいないよね」という話ですね。公募制なんですけど、やろっこが直接手を挙げてるわけじゃなくて、エイズ予防財団が手を挙げて、やろっこがエイズ予防財団に協力する形になっています。

その前に厚労省の研究班（市川班）があって、その研究班に参加していた、HIVについて活動しているゲイ・バイセクシュアル当事者のグループがある地域にコミュニティセンターをつくるということで、仙台が入った。別に事前に相談があったわけじゃなくて、厚労省が「ここにやります」と指定した7カ所に仙台が入っていたということです。

この場所は結構、家賃安いんですよ。たぶんこのビル自体が、安いんですね。

繁華街だし、市役所や県庁も近くて地の利はいいんですが、国分町を利用する人は基本的に仙台駅の方から来るので、このビルのある場所は出口にあたるんです。反対側、広瀬通り側が入り口なんです。

本当は入り口側のビルも狙って物件を色々見ていたんですけど、24時間使えなかったり、ビルの玄関に階段があってバリアフリーにできなかったりとかで、結局この場所にしました。車いすで来る人も想定していたので。

実際に開けてみたら、商業施設利用層じゃない、「やろっこ交流会」に来ていたような人たちがメインの利用層なので、商業施設から近すぎず、でも行こうと思えば行けるぐらいの、この距離感の場所でもよかったのかなとも思っています。開けてみてからですけどね。

ZEL の運営は、ほぼ自由です。一応厚労省の仕様で、週何回開館すること、夜を中心に開館しなさいとか、ゲイ・バイセクシュアル男性向けに啓発をできる場所にしてくださいとかということは書かれてはいるんですけど。でも、例えばどういうふうに人を集めるとか、チラシをどう配るとかっていうのは、全部任されています。

ここで Anego のティーパーティーを開いたりとか、そういう自由もあります。ただ、ZEL の場合は開館時間（月・火・金・土 18:00～22:00、日・祝 15:00～20:00）は基本、ゲイ・バイセクシュアル男性向けにしています。なので Anego とかは、開館時間以外の時間帯を使ってもらっていますね。

どの団体にも「セクシュアリティに関すること、HIV や性感染症に関することでお使いいただけます」と案内をしているので、それ以外の利用について問い合わせはないですね。例えばゲイサークルのミーティングとかでもいいですよと言ってるんですけど、サークルでミーティングってそんなにないみたいで。

◆「ゲイ・バイセクシュアル男性限定」にした理由

厚労省的には、ゲイ・バイセクシュアル男性に利用を限定する仕様ではないです。仙台と沖縄では、開館時間はゲイ・バイセクシュアル男性限定にしていますが、それ以外の東京・名古屋・大阪・福岡はセクシュアリティ問わず、たぶん誰でも来れるようになっていると思います。

特に東京なんかは、ゲイ・バイセクシュアル男性限定にしなくても、ゲイ・バイセクシュアル男性も来れるんですけど。やっぱり仙台とか沖縄は、ゲイ・バイセクシュアル男性限定にしておかないと、「他のセクシュアリティの人がいるかも」「職場の人と会うかも」と思うと来れないとか、そういうことがまだあるので。なので、ZEL はゲイ・バイセクシュアル男性限定ですっていうふうにしています。

難しいのは、ゲイ・バイセクシュアル男性限定にすると、職場の人とかストレートの人に会う心配は減りますが、逆にここに入るのは「ゲイ・バイセクシュアルですよ」ということになる。なので、ZEL の場所を1階にしていけないのは、そういうことです。他の階の物件もあったけど、「行くなら最上階だね」という話はして。同じフロアに他のお店も入っていて、整体とかもあるんで、エレベーターに乗ってる段階ではどこに行くのかは全く分からないようになっています。で、エレベーターを降りたらすぐ目の前が、ZEL になっているので、廊下でも見られない。その点は、場所選びのときに気を付けました。

それでも、この扉が開けられないという人は結構いて、3回目ようやく開けましたって人とかもいますね。

◆セクシュアリティフリーの「レインボーデー」

Anego の場合は、性別もセクシュアリティも関係なしで、主催者側も把握していないぐらいなので、誰が当事者かは本当に分からないんです。Anego のティーパーティーは、今でも来てる人の半分ぐらいはストレートの人たちなので、それでぼかす。みんな来てるというのでぼかす形です。

ただ、ZEL のほうは仕様もあるし、置いてある情報もほぼゲイ・バイセクシュアル男性向けに偏っているので。なので、ZEL は基本、ゲイ・バイセクシュアル男性限定っていうふうにしてますね。

ただ、今は Anego のティーパーティーの日とか、仙台市の HIV の検査会の日に合わせて、「レインボーデー」という名前を付けて、セクシュアリティフリーの日をつくってるんですけど、正直、その日のほうが利用数はものすごい多いですね。

レインボーデーをつくったのは、おとし (2017年) 頃ですね。それまでも Anego のティーパーティーの会場としては使っていたんですけど、終わった後に「じゃあ、帰ってください」になっちゃうんですよ。その後に ZEL の開館時間になるので。しょうがないから、みんなでどこかに続きで、2次会でお茶飲みに行くとかってやってたんですね。

あと結構、「ZELに行きたいけど、開館してる時間には(ゲイ・バイセクシュアル男性以外) 行けないもんね」という声もあったので。じゃあみんな来れる日をつくろうと。

実際にやってみたら、レインボーデーにしか来ないゲイ男性もいるんです。普段は逆に来づらい。「レインボーデーだから来ました」と言って、その上で普通にゲイだと言ってるんですよ。隠しているわけではないんですけど、ゲイだけが集まるとなると、「どんなところなのか逆に分からなくて怖い」っていう。ゲイバーに行くのが怖いというのと同じような感覚でしょうね。だから「今日はレインボーデーなので来ました」「誰でも入れるって聞いたから安心して来ました」みたいな人もいますね。

年代によっても違うと思います。年齢が上がるにつれて、「やっぱり女性がいるのはちょっと」「ストレートの人と一緒にするのはちょっと」という人の割合が増えますね。若い人はわりと平気みたいです。

◆ 普段の ZEL の様子

今の若い子でも普段の ZEL に来るような子の中には、これだけ情報があふれてるのに、情報にアクセスできてないんだなっていう子たちもたくさんいます。同性を好きなのは自分1人だと思ってたって人もいますよ、いまだに。

今、20歳の子が毎週金曜日に来て、「金曜日の男」とか言われてますけど、その子とかはそうでしたね。話をしていたとき、今はゲイ雑誌も『SAMSON』以外は廃刊になっちゃったんで、「廃刊になっちゃったゲイ雑誌もあってね」って言ったら、「そんなものあったんですか」「あるうちにデビューすればよかった」みたいな話になって。「本当に、誰にも言えなくて悩んでいて」って言ってました。その子は ZEL を自分で直接見つけたわけじゃなくて、最初に相談受けた人から私に「ちょっとこういう人がいるんだけど、ZEL を教えてあげてもらっていい？」と話に来て、私から「こういうところあるよ、俺もいるから大丈夫だよ」と言って、来てもらった感じです。

ZEL の開館時間は、来た人はみんな好き勝手に過ごしています。テレビもつけてるので。今、若い子は一人暮らしとかだと、家に結構テレビないんですよ。なので「テレビって新鮮」とか言いながら見てる子もいます。

あと友達とここで待ち合わせしてる子とか、ここで勉強してる子もいます。家で勉強する

とサボるっていうか、たぶん1人で勉強するのが苦手なんだろうね。

ふだんの開館時間に来るのは数人です。だからレインボーデーのときに突然、二十何人とか来ると、てんやわんやしちゃう感じですね。みんなが最初から最後までいるわけじゃなくて、入れ替わり立ち替わりですけど。

開館時間に来た人には、スタッフから軽く声はかけます。初めての人には「初めてですか」と聞いて、一応、どこから来てるのかとかは報告で必要になるので、聞ける人には聞いてます。すぐ帰っちゃう人もいるので、そういうときは聞かないですけど。

来た人全員に書いてもらう用紙があったりするわけではないです。基本は「何飲みますか」から始まって飲み物用意して、「好きなところ座っていいですよ」「何か欲しいものがあったら持って帰っていいですよ」という感じですね。

◆ZELの効果①検査につながる

ここで定期的に情報発信ができてることもあって、HIV検査に占めるMSM、ゲイだって答えている人の割合は徐々に上がってきてるんですね。じりじりと上がってきているのは、ZELで定期的に発信できてる成果だと思います。

あと、これは正しくはないんですけど、コミュニティセンターができたことで、仙台のゲイの中で「ZELみたいな場所ができたってことは、仙台はHIVが増えてるんじゃないの、やばいんじゃないの？」っていう情報が広がったみたいなんですね。確かに陽性の人の数が全体として増えている部分はありますけど、特に仙台が増えているわけじゃないので、間違った情報なんですけど。人口の多い札幌じゃなくて仙台にコミュニティセンターができてから、「それはやっぱりHIVが増えてるからでしょ」みたいになって。

HIVについて考えるのは何となく嫌だなと思いつつも、ZELのフライヤーを見たりするとHIVに関する情報が目につくことになるので。たぶんそういう意味で、検査の受検行動に結びついたりしてはしてるのかなと思いますね。

◆ZELの効果②無料で使えるスペースとして

Anegoのティーパーティーって参加費が500円で、ケーキとお茶が付いてくるんですね。でもしっかりしたケーキを出しているの、公共施設でやってるときとかだと、結構お金の面ではつらいんです。施設の部屋代もあるし、ケーキの値段も上がってて。

だから、ZELを無料で使えているのはいいことかなと思いますね。あと、時間を気にしなくても、そのまま残れる状況も今はつくれているので、その点も公共施設を使うよりいいと思います。Anegoの他にも、いくつかの団体が交流会で使ってくれています。

5. 東日本大震災

◆2011年3月11日

震災のときは仕事で名取にいました¹。沿岸部ではなかったんですけど、すごい揺れで「建物が崩れるな」と思いました。実際かなり傾いて、その後取り壊しになりました。

目の前で階段が崩れたんですね。崩れたというか、外れたんですよ。コンクリの階段なんですけど、屋上に向かってる階段の部分が2階の床から外れたのが見えたんです。私がちょうど、揺れで廊下から動けなくなっちゃっていた時で。目の前で階段が外れたのを見て、「これ、このままこの建物は崩れるな」と思いましたね。

最初はそんなに強い揺れになるとは思わなかったんですけどね。揺れ始めたときに2階から悲鳴が聞こえたので、「大丈夫ですか」って言ったら、すごい揺れで自分が動けなくなっちゃいました。

揺れが収まるのを待って、外に出て。車で会社に通っていたので、仙台市内にも車で帰ってきました。ただ、たまたま帰りに給油しようと思っていたタイミングで、ガソリンがほとんどなかったんです。

でも家に着く直前ぐらいにガソリンスタンドがあって。すごい列でしたが、並んでみたらガソリン入れられたんです。停電してましたけど、手回しでポンプを動かしてくれていて。

「20リッターまでですけど」「ハイオクしかもう残ってないですけど」と言われて、「じゃあ、ハイオク20リッターで」って入れてもらって。それで何とか、その後も助かりました。

本当は3月11日は、Anegoの現代表のキャシーさんが4月から熊本に行くことが決まっていたので、送別会の日だったんです。飲み会を予定してたんですけど、地震の直後はそんなに津波の被害の情報が入ってなかったから、仙台に向かうときに、「今日の送別会、キャンセルしますって店に連絡しようにも電話つながらないけど、キャンセル料は取られるのかな」とか、そのぐらいしか思っていなくて。

そしたらキャシーさんから、たまたま電話かメールかがつながって。キャシーさんの家は県北だったので、「仙台から帰れない」って連絡が来たんですね。で、その日は送別会の予定で、どうせ夜遅くなるだろうと、あらかじめ宿を取ってあげてたんですよ。なので「あなたのために取ってた宿があるから、とりあえず行ってみな。もしかしたら泊まれるかもよ」と伝えたら、泊まれたらしいです。シャワーは水しか出なかったけど、3000円ぐらいで泊まれた、みたいな話をしていました。

ただ、予約してない人は基本、全部お断りだったから、仙台で泊まる場所がない人たちがたくさんいたみたいでした。キャシーさんは「とりあえず1泊できてよかったです」みたいな話をしていました。

¹ 当時の様子はwebサイト「3がつ11にちをわすれないためにセンター」の「シリーズ：レインボーアーカイブ東北」内に、手記「ゲイとしてのつながり・絆」として記録されている。
<https://recorder311.smt.jp/blog/39984/>

◆震災直後のZELの状況

震災の翌日、3月12日の仕事帰りにZELの状況を確認しに来ましたが、全部ハチャメチャでした。ZELの入っているビルもすごく揺れたみたいで、全部が全部、ぐちゃぐちゃになってたんですよ。

エレベーターも止まっていたので、階段で9階まで上がってきて。ただその日は鍵を持ってくるのを忘れて、ZELの中は確認できなかったんです。当時は隣がパソコン教室だったんですけど、そちらは窓が素通しだったのでのぞいてみたら、パソコンが全部落ちてました。とりあえずその日は当時のスタッフと連絡を取って、「結構すごいことになってる」とだけ確認しました。

13日に鍵を開けて中に入ったら、もう本当にぐちゃぐちゃで、パソコンもテレビも、チェストの中にあっただけのものも、全部床に落ちていました。スタッフと、あとボランティアの子が1人手伝ってくれて、全部片付けをしました。

スタッフと相談し、交通機関等もまだ乱れていたんで、14日の月曜日は開館しないことにしたんですね。16日になって、18日から再開することを決めて、ホームページに告知を入れました。

うちのボランティアとかはみんな無事でした。Anegoのほうで、安否確認や情報発信はやってたと思います。他の人は結構すぐに分かったんですけど、ただ初代の代表だけは女川で被災していて、安否確認にちょっと時間がかかりましたね。

17日にはZELのホームページやmixiなどを使って「被災された方の中で抗HIV薬を処方されている方へ」という告知も始めました。主治医や電話相談へ連絡し、薬が飲めなかった場合の対応方法を教えてもらうようにという案内です。翌日には情報を更新し、医療機関が発表した対処方法へのリンクを貼りました。

18日にZELを再開してからは、みんなで食べ物を持ち寄りもしましたね。

あの時期は街を歩いて、たまたまゲイの友達と会ったりすると、「わあ、震災後、初めてゲイの友達に会った」とか「震災から全然、ゲイの人たちと会えてなくて」と言われることが結構あったんですね。「リアルでゲイの人と会えたの、震災後初だ」とか聞いていたので、「これはもしかしたら、大変なときだけど、みんなゲイ同士で会いたいのかな」と思って、ZELを再開したという感じです。

あと、震災後は公共施設がずっと閉まってたんです。サポセン（仙台市市民活動サポートセンター）は1週間後から開いていたんですけど、それ以外はたぶん、もう何か月も使えなくて閉まっていたと思います。

だから「セクシュアルマイノリティの人や、セクシュアリティのこと、性感染症のことをやっている人とかで、ZELを使いたい人がいたらどうぞ使っていていいですよ、ZELは開いてますんで」と言ったんですね。それでMEMEさん（本冊子にインタビュー掲載）がやる「早×早お茶っこ飲み会・仙台」が、「じゃあ、使わせてください」ということで来て。実はそこで初めてMEMEさんとお会いしました。震災前はお互い知らなかったし、SNSとかでもつながっていなかったんです。

◆安否確認

自分自身の家族や実家は、特に大きな被害はありませんでした。地震で揺れて、診断的には一部損壊とかにはなりましたが、特に生活に困ったことはなかったですね。

スタッフも、沿岸部じゃない人はわりとすぐに連絡がつかしました。沿岸部の友達も、1週間以内ぐらいには、みんな大体、ぽつぽつと連絡は来ていましたね。「人としては無事だけでも、車は全部流された」とか。あとは避難所にいた友達から「避難所は消灯も早いし、何もすることがなくて暇だから、電話帳に入ってる人に片っ端からメールしてます」というメールが来たりとかはしていました。

沿岸部のほうで、なかなか連絡がつかなかった人も、無事だということは人づてで確認できてきました。

◆5月にクラブイベントを開催

みんなと連絡がついた後、(2011年の)5月にクラブイベントをやりました。もともと、やろっこで5月にクラブイベントを予定していたんです。で、震災があったので、やるかやらないか悩んでいたんですが、会う人会う人に「ゲイの友達に会いたい」とってすごく言われたので。

「じゃあ、予定していたクラブイベントを、そのまま5月にやりましょう」と言って、ゲストで決まっていた人に連絡をして、来れるかどうかの確認をして。1人、原発のことがあって怖いと言ってる人もいたんだけど、他のゲストが説得してくれて来てくれました。

もともとは予定してなかったゲストも、全国から来てくれました。以前からつながっていた人たちが「何かできないか」と言ってくれて、結果として、すごい豪華なクラブイベントになったんですよ。

当時、すでに解散していた「ピンクレゲイ」という、ゲイ2人でピンクレディーのカバーをするグループが名古屋にいたんです。すっぴんだけど、衣装はピンクレディーという人たちで、聴覚障害があるんですけど、完璧に踊るんですよ。すごい人気があるグループで、解散していたんですけど、「復興のためだから」と再結成して来てくれて。皆さん、本当に「ノーギャラでいいです」と言って来てくれて。「交通費ぐらいは出します」と言ったんですけど、結構、皆さん「交通費もいいです」みたいな感じになって。大阪、名古屋、東京からも色んな人が来てくれて、結構、豪華なゲイナイトになりました。

来場者は120人ぐらい来ましたかね。震災の後、1週間以上連絡が取れなかった友達も、来てくれました。

◆寄付やメッセージ

2011年4月からの1年間は、ZELがオープンしてから一番、たくさんの人数が来ているんです。やっぱりみんな、人に会いたくて来るんだなと感じました。ただ、震災に特化したプログラムは、特に何もしてないです。

全国のいろんな団体さんから、寄付は結構もらいました。台湾から寄付とメッセージ(写真)ももらいました。台湾のレッドリボン基金という、HIV関係の活動をして、コミュニテ

イセンターも運営している団体です。そのコミュニティセンターの来場者からのメッセージを付けてくれて。台湾から直接持ってきて、届けに来てくれたんですよ。

その団体とは、もともと接点はありませんでした。ただ彼らは、名古屋のイベントには結構来ていたみたいで、名古屋のコミュニティセンター経由で連絡をもらって。「2011年の6月に名古屋のイベントがあるので、そのときに仙台まで足を伸ばして、メッセージを届けたいと言ってるんだけど」と言われて、じゃあお待ちしていますと。寄付と一緒にメッセージを頂きました。その後、被災地を見て帰られました。

一番最初に寄付をくれたのは、沖縄からでした。震災の後、沖縄のゲイバーの皆さんが「何かできないか」と話し合ってくれていたらしく、沖縄のコミュニティセンターが窓口になってくれて、寄付をもらいました。

それで、頂いた寄付を何に使うかという話になったんです。例えば、壊れた備品とかは全部厚労省のものだから、厚労省のお金で何とかできるので。「じゃあ、クラブイベントのときの費用にしようか」という話になって。イベントに回して、その分、入場料をちょっと抑えることができました。



震災後、台湾の団体から贈られたメッセージ（ZEL 内で撮影）

6. 仙台という地域性

◆9割は宮城県内

ZELに来る方の9割は宮城県内の人です。次に多いのが福島・山形ぐらいいですかね。

その次は、東北の他の県よりも、東京の人になっちゃいます。東京の人たちは新宿2丁目にaktaがあるので、出張や観光で仙台に来たとき「まずコミュニティセンターに行けばゲイバーの情報を教えてもらえるよね」という感覚で来られるので。なので、福島・山形の次は東京の人ですね。

Anegoも、山形とか隣県から来てる人は結構います。たまに東京からの参加者もいて、尋ねると、「たまたまこっちに来てて」とか、「こっちの知り合いと一緒に来て」みたいな感じだったりします。ですけど、基本はやっぱり宮城県内からの参加者が多いですね。

東北全域から来るかというのと、そうでもないですね。秋田、青森、岩手の人たちは、新幹線で仙台で降りるんだったら、そのまま乗って東京まで遊びに行くんだと思います。結局みんな、コミュニティセンターに来るわけじゃないですから。遊びに行くんだったら、仙台で降りるよりは東京まで行こうという感じで。

福島・山形だと在来線や高速バスで来れたり、1時間ぐらいいで来れたりするから、別に東京に行かなくてもいいかなってなると思うんです。特に山形の場合は、東京に行くには仙台を経由するか、福島を経由するかなので、「じゃあ、すぐに行ける仙台でいいかな」ってなるんだと思います。

◆多くのゲイバーが男性限定

先ほどもお話した通り、他のコミュニティセンターは男性だけでなくミックスですが、仙台と沖縄はゲイ・バイセクシュアル男性限定です。お店（バー）を見ても、新宿2丁目は今、ほとんどのお店がミックスで、一部の脱ぎ系のお店だけが男性限定になってるという状況なので、コミュニティセンターもそうですよね。

仙台の場合、ミックスのお店で、観光バーが何店かあるのは知ってますけど、基本的に観光バーは、うちのマップには載せていないんですね。というのは、マップに載せてもらうということは、そのマップを観光バーのお店にも置くことになる。そうすると、ゲイ男性しか相手にしていないお店からしたら「観光バーに来るような人にもマップを配られちゃうと、うちの店にも来ちゃうよね」ということがあるので。

だからマップでは、女性は入店可能な場合でも、どのお店も「事前に相談必須」と書いてあります。あとは、男性オンリーのお店です。マップに載っているうち、女性が入店できるお店は3つですけど、基本は「相談してください」となっています。だからこの状況だと、やっぱりコミュニティセンターも、基本的には男性限定になるかな、という感じですね。

以前に1ヶ月くらい、レズビアンの子がすごい頻度で来ていたときがあったんですけど、来なくなりました。レズビアンの子が来てても断りはしないんですけど、その子も別にゲイの子と話をするわけでもないし、ひたすらここにいても全然女の子は来ないわけじゃないですか。メリットないですよ、レズビアンの子も。なので、来なくなりましたね。

◆年齢層

他地域のコミュニティセンターと比べて、仙台ならではの、東北ならではの、というのはそんなにないですね。他の地域のセンターよりは、私や、常にいるスタッフの年齢が高いので、たぶん若い子の割合が少ないです。平均年齢がちょっと高いと思います。

うちは R35 っていうイベントをやっていたりするんですけど、その時は 60 代、70 代の人とかも結構来ます。たぶん他のセンターでは、その世代の人はほとんど来ないのではと思いますね。

◆ウェブ発信の難しさ

若い人たちは基本、ネットとかで出会ってという感じが多いみたいですけど。うちに来る若い子は、そういうところから遮断された子たちが来ますね。

基本、若い層でもバーなどの商業施設につながってくれていけば、うちからの情報は届けられるので。ZEL として考えるのは、そこから漏れている人たちをいかに拾うか、という点ですね。

厚労省からも全国のコミュニティセンターあてに「ウェブでの啓発にもっと取り組み」という要望があるんですけど、今の若い子たちがウェブで何をやってるかという、基本、たぶん Twitter とかなんですよ。

Twitter への介入って結構、難しくて。フォローをしてもらわない限り発信ができないし、あと Twitter はものすごい数の情報が流れていくので、今度は常時で Bot みたいな感じにして定期で流してると、それはそれでブロックされて終わりになるし。なので、Twitter への介入はすごく難しいかなと思っています。

あと、じゃあウェブでやれば全部いいのかというと、実はそんなことはなくて。

例えば、この間まで秋田にはゲイバーがなかったんですね。ゲイバーがない頃、秋田の若い子に「どうやって出会ってるの？ やっぱりネットなの？」と聞いたら、ネットも見ないって言うんです。というのは、ネットで例えば掲示板やアプリケーションを開いても、いつも同じ人しかいないので、ネットをする意味がないと。ネットでの出会いも限られているから、意味がないと。

「じゃあ、どうしてるの？」と尋ねたら、「一番確実なのは友達の紹介だよ」と言っていて。月に何回か、ファミレスでゲイのお友達で、みんなで集まるんですけど。そのときに自分が、どこかで知り合った人、ネットや Twitter で見つけた人かもしれないですけど、その人を連れてきて、紹介する。「シェアしてんだよね」みたいな感じで言っていました。

そこで新たな友達ができたり、その出会いで恋人になったり、セックスしたりとかというのがあるんですけど、それが一番確実な出会いの方法で、そうやって 1 人ずつ増やしていくと。そうすると、そこでつながった人から、また別の人が…という感じで。この方法が確実だと言ってるのを聞いて、「これはウェブ介入だけじゃ無理じゃん」と思いましたね。

だから、Twitter とか LINE とかは多くの人に使われていても、そこへ向けてどんな情報を流すのかは、ちょっと難しいなという話はしていますね。

今は、「Twitter の場合、フォロワーが多いインフルエンサーみたいな人を使うしかない

のでは？」というような話にもなっています。ゲイの中の有名人って、やっぱりいるので。ごくごく素人なんだけど、何千人というフォロワーがいる人もいますよ。そういう人たちに協力してもらったりしないと、情報発信は難しいのかなという気がしますね。

◆メディアなどには出ていない

自分自身が仙台の出身ということもあって、実は新聞やテレビなどのメディアには出ていないんです。公言して顔出しで活動している、というわけではないですね。

Anego のリーフレットには写ってますけど、かつらをかぶって、ひげも剃って、メイクをしている写真です。撮影の時に、「トランスジェンダーや性別の分からない人も1人ぐらいいないと、Anego 的にまずいんじゃない？」という話になって、それで。「ドラッグじゃまずいよね」ということで、すごいナチュラルメイクで撮ってます。

こういう活動をしていく上で選んだ職場なので、職場ではカムアウトしています。あとは同級生の、中学校のときに仲良かった友達の中で、結構な割合でゲイがいるんですよ。「だから仲よかったんだ」みたいな。

なので今、付き合いのある人たちは、家族以外は知っている状態ですね。大学の同級生の中には一応、こちらからカムアウトしている人もいます。大学の同級生はほとんど地元の子じゃないですが。

たぶん私、子どものころと比べると、顔がものすごく変わってるんです。だから小学校の頃の同級生に会っても気付かれないし、中学校の頃も、高校も、大学の同級生ですら気付かれない。学生時代から顔が変わってきているので、例えば同級生と道ですれ違ったりしても、こっちは分かるけど、あっちからは分らない。仕事上で会った大学の同級生に、「同級生です」と言っても、「ええ？」って、全然思い出せないぐらいなんです。

◆仙台に残った理由

卒業後、東京で就職しようとかはあんまり思いませんでした。たぶん、東京で生活できるとは思わなかったですね。というのは、そんなに都会になじめるタイプじゃないと思ってたというのが一つ。あとはやっぱり大学までずっと実家だったので。結局は実家から出ていきますけど、県内にしたのは、親が高齢ということもあって、という感じですかね。

大学進学の際に本当は県外に出たかったんですけど、親から反対されて。「東大に行くんだったら県外でもいいけど、東大以外なら県外は駄目」みたいな感じで言われたこともあって。それもあって、地元縛りがすごくあったんですね。だから地元で就職も探したし、という感じでした。

だからことさら地元愛があるというわけではないです。特に仙台ラブとかじゃ全然ないんです、実は。偶然の積み重ねです。だから、親が亡くなったら、仙台にそのまま残っているかは分からないです。一時期、彼氏が東京にいたことがあって、そのときは、東京で一緒に暮らすという話も出てなくはなかったんです。そのあと震災があったりして、その話は流れましたけど。

◆東京に遊びに行く人の多さ

仙台以外のほかの東北の地域と、仙台との違いを意識することは、そんなにないですかね。仙台の人も含めて、東京に遊びに行ってる率はものすごく高い。だから、仙台から東京に遊びに行くのと、青森から東京に行くのと、そんなに変わらないかなとは思ってます。

以前、東北のLGBT向けの調査で、「過去6カ月間に、東京に仕事・観光などで一度でも行きましたか」という質問について、「はい」が6割だったんですよ。そんなにサンプル数が多い調査ではなかったんですけど、「やっぱりみんな行ってるんだ」と感じました。

例えば仙台だと東北の他の地域より出会いが多いかということ、別に多くもない。たぶんそれは、福島でもそんなに変わらないかなという気はします。東京とか首都圏のほうが出会いの機会が多いというイメージだと思いますね、やっぱり。

◆「東北は保守的」は本当か

厚労省に提出している書類とかでは、「東北は保守的だから」といったことを、あえて使うこともあります。「東北は保守的だから、こういう活動が必要です」みたいな感じで言ったりはしていますが、実際はどうなんですかね。

ずっと住んでいる人が多ければ、保守的な考え方というか、ずっと地元に住んでる人が活動を起こしにくいというのはありますよね。Anegoのキャシーさんが熊本に行って、「熊本のほうが活動するのにオープンで、活動しやすい。やっぱり東北は保守的だ」と言ってるんですけど、「それはあんた、東北の人だから、熊本の人じゃないからでしょ。熊本に親戚も何もいないからでしょ」という話をして。「熊本では顔を出して、名前も出して、オープンリーゲイとして活動できてました」みたいなことを言ってるから、「それは知り合いがいないからだよ」という話をしましたね。

◆地元で活動するということ

私自身は仙台出身ですけど、地元だからという難しさは感じないですね。たぶんそれは、先ほども言った通り、顔が変わってきているというのが大きいと思います。

同級生とかも、もう卒業したら会わないタイプなんですよ。中学校の同級生とも、基本、卒業して中学校から高校になったら、中学校の友達とも会わなくなっている感じなので。年賀状をやりとりしてるぐらいの人はいますけど、

親戚のこともあまり気にしないですね。もう高齢なので。いとことかともそんなに仲よくはなくて、そうすると残る親戚は、高齢の、介護施設に入っていたりという年齢なので。だから親戚の目とかを考えることはほとんどないです。

結婚プレッシャーは一応、あつたりします。いまだにうちの母親が「男はまだ結婚できるからね」とか言ったりしますけど。でも今は時代的に、40で男性で独身といっても別に珍しくないです。

やっぱり30代の頃のほうが、結婚プレッシャーはありましたね。「結婚は？」という話は親戚からもありました。でも母親も、自分が言う分にはいいんだけど、親戚から言われると嫌らしくて。母親が親戚に対して「今どき結婚しない人なんかいっぱいいるんだから」「あ

んた、考え方が古いよ」みたいなことを言っていました。

◆震災後に増えた結婚プレッシャー

震災直後に結婚プレッシャーが増えたというのは結構、ゲイの中では聞きました。絆婚ブームですね。

避難所からメールをくれた友達は、当時50代だったんですけど、親から「おまえ、結婚するのか」と改めて聞かれたとか。親戚からも、もう50を過ぎてるのに震災直後に結婚の話をしごくされて戸惑ったと言っていましたね。

「結婚しない」と親に言ったら、ご自宅が流されたので、自宅を再建するにあたって二世帯住宅にするべきかどうかを親は確認したかっただけらしいんですけど。「50を過ぎて、まさか結婚は？とか、結婚しないの？とか、結婚はやっぱりしたほうがいいんじゃないの？って言われるとは思わなかった」と言っていました。

7. 活動の将来

◆やろっことZELは自分たちの世代まで

仙台はいろんな地域から人が来て、短期間滞在して出ていく街ではありますね。ここに住んで、定着して、活動をやっていこうという人は、多くないと思います。学生さんも多いけど、就職で仙台に残る人はほとんどいないですから。

なので、20代のボランティアとかにどれだけ続けてもらえるかは、その人のライフステージ次第だと思っています。もし地元に残ったとしても、仕事が忙しくなったらできないですからね。だから、一時的なボランティアというふうにしかな見てないです。「そのままずっと残ってくれ」といった束縛をするつもりは全くないです。

やろっことZELは、たぶん私の代で終わるといふふうに思っています。というのは、社会がもうたぶんそういう方向になってる。HIV、エイズについて、あと20年後にこの活動がまだ必要な社会であるというふうには、私は思ってないです。20年経ったときには、HIVはただの普通の病気になっているだろうなと思っているので。

なので、次の世代を育てようと実は思ってないのがZEL、やろっこですね。

HIV、エイズについては、病気自体が20年後はたぶんもっと、重さが軽い病気になっていくというふうには思っています。この後、ワクチンとか出てくるでしょうし。今も、PrEP（プレップ）といって「薬を飲んでおくと感染しない」という予防方法が出てきているので。かなり予防法が進んでいますし、感染した後も、薬は飲み続けなきゃいけないけれども、ほぼ感染前と同じ生活はできる。

海外だとすでに、薬を飲んでる感染者の人が、「自分はもう薬飲んでます、検出限界以下になっています」みたいな話をすると、別に出会いが制限されることはないという状況にもなっています。むしろ検査を受けてない人のほうが、「あなた、検査を受けてないんだっから付き合えませんか」と言われるような状況にもなっているのです。

陽性者が置かれる立場もだいぶ改善されると思います。ただ、それが来年、再来年という

話じゃなくて、たぶん10年、20年はかかると思いますけど。

これから新たな感染者がものすごく増えるかという、たぶんそんなに増えないかなとは思っています。

なので、20年後に今と同じ規模の活動が必要というふうには、思っていないですね。分かんないですけどね。

◆Anegoの将来

Anegoもこの間10周年を迎えて、今の代表は「10年経って社会も変わったから解散してもいいかな」という話はしていたんですけど、「でも、ティーパーティー、人来てるんだよね。ニーズまだあるんだよね」という感じなので。

Anegoもたぶん、特に10年、20年後に今と同じ形の活動が必要かという、たぶん必要ないよねという話にはなっていますね。もっと普通になれるよね、ということで。セクシュアリティのところは、たぶんそうなっていくだろうと。

例えば2008年にAnegoのパンフレットをつくったとき、セクシュアリティのところの括弧の中の説明が間違ってるんですね。性的指向となっているんですけど、これはセクシュアルオリエンテーションなので、セクシュアリティとは正確には違う。

これ実はあえて間違えておいたというか、2008年って、「性のあり方」とか言っても、まだ全然通じない時代だったんですよ。なので、性的指向と書くと正確には違うけど、この間違いを指摘する人って研究者とか当事者とかだけで、その人たちに向けてのパンフレットじゃないから、これでいいよねと言ってつくってた。でもたぶん今これを出すと、違えますよねって結構、突っ込まれることが増えてると思います。

今はセクシュアリティという言葉自体がたぶん一般化したので、ホームページとかでは、もう括弧は取ってます。

◆ボランティアスタッフ

やろっこでメインで活動してるのは私と、ZELの常勤スタッフで、両方宮城県出身です。手伝ってくれてるボランティアは、学生だと他県から大学進学で来てるっていう子とかですね。社会人で手伝ってくれてる人たちは、みんな宮城県出身です。

ボランティアは、最初は一般の参加者として来て、というルートですね。最初から「ボランティアしたいんです」と言って来る子たちは、たぶん自分の居場所がないから来るんじゃないかと、少し警戒する部分もあります。まだ20代の学生の子とかなら全然それでいいんだけど、30過ぎて「ボランティアしたいんです」って来る人は、最終的にトラブルを起こして去っていくことも多いので、ちょっと警戒しますね。

なので、むしろ参加者として常連になった人に、ちょっとずつ手伝いをお願いしていった、「あれ、気付いたらボランティアに数えられてます？ 私」みたいなふうにルートをつくるようにしています。

ストレートの人たちに「かわいそうなLGBTの人たち」という構えで来られると、違和感がありますよね。「LGBTって性的少数者だから、出会いも少ないじゃないですか」と言

われるんですけど、「そんなことないですよ」と言っていて。「学校とか職場で出会おうと思ったらそうかもしれないですけど、ヘテロでも学校や職場で出会ってる人って少ないですよね」みたいな話をして。「例えば学校とか職場で出会っていても、そこから親密になるには、例えばみんなで海に行きましょうとか、そういうことが必要じゃないですか。じゃあ、10人で海に行った場合に、ストレートの人たち10人だと5対5だから、自分と付き合う可能性がある人は5人じゃないですか。でもゲイ10人で行きましょうって言ったなら1対9なんですよ。だからその場合、どっちが出会いがあるか。9人から選べるのと5人からしか選べないの、どっちが出会いが少ないですか」という話をするんですけど。

LGBTがすごいかわいそうだと思っている人とかだと、「出会いも少なくって言うから、「いやいや、めちゃくちゃ出会えてます」みたいな。コミュニティとつながってからの出会いの機会は、LGBTのほうが多いので。それこそほぼ全部が、婚活に行ってるようなものですよ。出会った先がみんな、求めてる人たちばかりな感じだったりするわけなので。

8. 活動への評価と課題、そして今後

◆やろっことZEL

やろっこやZELが目指しているのは、まずはHIVの新規感染者の減少ですね。あともう一つ、感染している陽性者の人たちがもっと暮らしやすい、もっとそんなに悩んだりしないでいいような社会になっていくこと。

感染者数のほうは数の問題なので、減ってきたら数値で分かりますけど、陽性者のほうのテーマは本人がどう感じるかとかだったりするので、評価の指標としては難しいかなと思いますね。

活動の中の課題としては、一時期はボランティアのリクルートを課題にしていたこともありました。でも社会が変わってきて、HIVのことに関してはたぶん20年も続かないだろうと思っていて、「次の代へ」とかはあまり考えていないので、あまり課題として意識しなくなりましたね。

他の地域のコミュニティセンターだと、雇用の問題もあって、コミュニティセンターの存続とか継続とかを考える必要があるんですけど、うちの場合、もう1人の常駐スタッフはもう65歳以上で、雇用の継続をそこまで真剣に考えなくてもいいので。

だからうちの場合は、予算が続く限りの活動として考えています。「予算をどうにかして活動を続けよう」とは思わず、与えられた状況に合わせた活動をしていけばいいかなという感じなので、そんなに課題で悩んでるところはないですかね。

◆Anegoとの関わり方

今は活動をしていて疲れることもそんなにないですし、疲れるほど活動してないというふうに、自分では思ってますね。

Anegoの活動ができて背景としては、もともと自分がLGBT当事者として悩んだことがないんですよ。悩んでないので、支援というふうに思わないんだと思います。支援が必

要とも思わないというか。ただ、求めている人たちがいて、人がいっぱい集まってくるから、活動を続けたほうがいいよね、場所の提供はするよね、という感じで。

結構、Anego に対しては、実はプロボノだと思っていて。本職は市民活動の支援を仕事にしているで、私が持っているスキルを Anego に提供してるだけなんですよ。

なのでたぶん、そんなに課題意識がない。ただ逆に、LGBT を取り巻く課題などを冷静に整理できるのかもしれませんが。整理して、あとは自分のスキルを使って、効果的な方法を考えていく。

例えばティーパーティーに参加する場合は web 上の応募フォームからの申し込みで、個人情報はいらないですよ、という風にしてるんですが、そんな感じでスキルを提供して手伝っているという感覚です。結構、新しいことを色々できる場でもあるので、逆に自分の職場での仕事にもプラスになってますね。

ここに誰かが来て救われてるとも思わないですし、そんなに大層なことをやっていると思わない。なので、「これが課題だな」という意識もそんなに感じないですね。

Anego については、自分がメインでやってるという感覚は、たぶんないです。途中、間をつなぐための代表はしてましたけど、基本はプロボノとして関わっているの。やろっこ交流会とかでのスキルを Anego のほうにも提供できるし、そこで活動してきたことを LGBT 全般の活動、セクシュアリティ全般の活動にも持っていけるよな、という感じで手伝ってる意識です。

◆Anego の代表

Anego のほうは代替わりもしていますけど、わりとコアメンバーの中で交替してる感じなんです。新しい人が来てその人に替わったというよりは、徐々に替わってるんです。それぞれの事情で、初代の代表は忙しくなって、2代目は転居して、というところで。「代表できなくなりそうだから、誰かやってくれない？」と。

Anego の代表って、そんなにやることもないんです。そんなに大変じゃない。

ティーパーティーぐらいしかメインの活動はないですし、それももうパッケージになっていますから。チラシもフォーマットがあって、文章を入れるだけ。キャシーさんから「今回のティーパーティーのテーマはこれにしようと思うんだけど」と言われて、みんながいいねとなったら、チラシの文章を考えて。「これでどうですか」と聞いて、OK ならその文章を入れて。日付を変えて、データを印刷して、チラシを配って、同じデータでブログとかを書いて。

あとは当日、ケーキを買って、この会場でやればいいという感じなので。もうパッケージになっています。

Anego のコアメンバーはやっぱりゲイ男性ですね。ただ、キャシーさんはゲイというよりは、MtX ですけど。

Anego に関しては、今までの代表とかを見ていると、LGBT のことに関心があって、その中で課題意識がかなりある人たちだとは思いますがね。自身が色々な経験をしてきている中で、ちゃんと LGBT のことを伝えたいと。

過去のメンバーの中には、かつていじめを受けていた経験がある人もいますが、そのことはあえて、あんまり伝えたくないみたいです。「LGBT、イコールいじめられる人」になっても困るみたい。今は別に楽しく生きているのに、過去のいじめられたことだけを取り上げられて、それをLGBTの講演会で話してくださいと言われるのは嫌、という話もしてたりしますね。そういう点も含めて、何らかのLGBTとしての課題意識はある人たち、ということかなと思いますね。

例えばZELでお手伝いしてくれる人や、イベントをやるときにお手伝いをお願いする人も、「イベントとか楽しそう」とか、「時間が空いてるからやります」みたいな感じだったりするので。最初から「誰かのために」とかじゃなくて、楽しそうだから来て、少しずつ巻き込まれていく。キャシーさんなんか完全に巻き込まれたタイプだと思います。

キャシーさんは、最初はただ単にドラッグをやりたいかった。ドラッグから入って、「気が付いたらAnegoの代表になってるんですけど」みたいな感じですからね。自分で「周りの人が辞めていったから、消去法で私になったんです」みたいに思ってますよ。

◆今後やりたいこと

今、パレード（2019年9月16日・SPJ仙台プライドジャパン）の動きが仙台でも出てきているので、そこは協力したいなと思っています。それこそAnegoの今の代表のキャシーさんも、最初はパレードをやりたいという話もしてたんです。パレードをやるにあたって、仙台でLGBTのコミュニティというとやっぱりお店など商業施設が中心というか、そこに受け入れてもらえないと難しいよねという話をしていたんです。そんな中、今回のパレードは、お店側から出てきた話なので、それはちょっと応援をしなきゃいけないかなというふうには思ってます。

Anegoの活動の中にも「あらゆるセクシュアリティを尊重する活動の応援」とあって、応援することも活動の中にとりわけて占めているところはあるかなと思っています。ネットが普及して、やっぱり仙台もゲイバーとかの数が減ってきてるんですが、対面で会うところはどれだけ時代が変わっても必要なと思うし、そういう場づくりは時代が変わっても、何らかの形でしていかなきゃいけないのかなと思いますね。それこそ秋田で、ゲイバーがなくてもみんなが集まっていた、そこが一番だった、というのと一緒で。

自分たちの団体がイニシアチブをとりたいという思いはないですね。たぶん同じ活動をする団体が出てきたら、Anegoはやめると思います。

まだ今は対等なごちゃ混ぜの交流会が他のグループから出てきてないからティーパーティーをやり続けてるけど、他でそういうことをやってくれる人が出たら、たぶんAnegoはティーパーティーもやらなくなると思いますね。他にやる人がいないから、とりあえず今は自分たちがやっている、という感じです。

◆ボランティアは身近だった

エイズの活動をしていることは、家族も知ってます。川田龍平君の劇を見に行ったときは、母親に誘われて一緒に行ってるんです。「あんた、エイズのことに興味あるんだったら、こ

ういうのが来てるよ」と言われて、「じゃあ、見に行く」って母親と行ってるんで、そのところは知ってますね。

母親も結構リベラルだと思います。福祉系の短大出身で、もともとボランティアをめちゃくちゃやって、今でもボランティアをやっている人なんです。だから学生の頃、俺はボランティアとか全然してなかったんですけど、高校とか大学の頃に母親がやっているボランティアで欠員が出ると手伝わされてたんです。当時はボランティアに行くと「お母さんの意志を継いでこれからボランティア活動していくのね」とか「そっちのほうに進むのね」とか言われて、「いや、今日はたまたま手伝ってるだけで、そんなつもりは全くありません」と言っていました。

うちの長女の姉も、大学のときはボランティアサークルにいて、障害がある子とかがうちに遊びに来たりとかもしていたので。そういう意味で、多様な人と接するのはそんなに苦じゃなかったかもしれないですね。大学生のときも「手伝って」と言われて、筋萎縮症の方の介護と一緒に泊まったりとかもしていました。でも特に使命感があってやってたわけじゃないから、こっちも寝てて、ハッと起きたらすごい苦しそうにして「ごめんね、寝ちゃった」みたいな感じだったりとか。

やっぱりボランティアさんだと思えば結構、当事者が遠慮しちゃうんですよね。だからたぶん、そのことは感じていたんだと思います。「ボランティアで来てる人」と「ボランティアされる人」だと、ボランティアされる側がたぶん遠慮しちゃうというのは、感じていたのかもしれない。そのときにも感じていたのが、今の活動につながるような、「支援する側・される側と分けるのはちょっと違う」と考えるきっかけだったのかもしれないですね。今、お話ししていた中で気付いたことですけどね。